私の３冊

私はどのようにして社会調査を学んだか

海野道郎
東北大学 名誉教授

東京大学の工学部工業化学科で基礎教育を受けた私は，社会学科や教育社会学科などの卒業生が受けたような正統的な社会学教育・社会調査教育を受けていない。しかし，その後の研究活動の中で社会調査を活用し，講義や演習で社会調査を扱ってきたことも事実である。本稿では，正統的専門教育を受けていない人間がどのようにして社会調査法を学んだかについて記したい。社会調査を学ぼうとする人，特に正規の教育を受けずに社会調査に従事している人に，いささかなりとも参考になれば幸いである。

統計的社会調査の基本書

『統計調査法』西平重喜著
培風館，1957 年

正規の教育を受けていない，といっても，全くの無手勝流で社会調査を行ってきたわけではない。化学からの転向先である東京工業大学大学院の社会工学専攻には，「社会調査」という2単位の基礎専門科目が用意されていた。担当の穐山貞登先生は心理学をバックグラウンドとする創造性研究の専門家だったが，統計数理研究所（統数研）の林知己夫先生などとも近く，「日本人の国民性調査」や「数量化理論」なども紹介された。1973年の国民性調査では，一調査員として，羽田空港近くの町工場が混在する地域を担当した。そのような縁もあって，後に，鈴木達三先生が主宰する社会調査法研究会に加えていただいた。ここには，統数研内部だけでなく，研究所外の人たちも集まっていた。また，統数研の公開講座では，西平重喜先生から社会調査法の基礎を学んだ。その時のテキストが西平重喜『統計調査法』である。

西平先生は数学科の出身だが，この本には，数学科出身者にありがちな,エレガントだが簡潔すぎて分かりにくい，という点が見られない。統数研の対外研修部門を担当していた経験が活かされているのだろうか，丁寧に分かりやすく書かれている。WEB調査が盛んな今となっては，いささか古風に感じられるかもしれないが，この本で学べば，統計的（計量的）社会調査の基本的な考え方と技法は習得したといえるだろう。

方法論・技法の最前線

『Methodology in Social Research』
Blalock, Hubert M., Jr. and Ann B. Blalock 編
McGraw-Hill，1968 年

話は前後するが，新設の社会工学専攻（私は大学院1期生）で学び始めていた私に，学部学生時代に一緒に男声合唱団コールアカデミーで歌っていた竹内清君（教育社会学）から声が掛かった。教育学部の大学院ゼミに出てこないか，というのである。親しい友人からの声掛けなので，何も考えずに大岡山から本郷に出向いた。それは，文学部の青井和夫先生が担当するゼミだったが，論文を構成する一文一文と前後関係とを吟味して議論の進め方を確認する，緻密な読み方に驚いた。「文科系ではこのように文献を読むのか」と感動した。そのゼミで使用したテキストは,ブレイラック夫妻が編集したHubert M. Blalock and Ann B. Blalock *Methodology in Social Research*という論文集だった。測定と概念化，比較調査の計画と解析，実験計画と変化データの分析の3部を構成する11章は，いずれも当時の先端的論考だった。後にパス解析や構造方程式モデルに発展するブレイラックによる因果推論やブードン（Raymond Boudon）による相関分析，変化の分析に関するコールマン（James S. Coleman）の論文は，知的興味を喚起するものだった。

ちなみに，編者であるブレイラックは，私が新渡戸フェローとしてシカゴ大学に滞在していたときに参加した1979年のアメリカ社会学会大会時には，会長を務めていた。会長講演に先立って，“He is a teacher of teachers here”と紹介されたのが印象的だっ

た。*Intergroup Processes*（1979）, *Race and Ethnic Relations*（1982）, *Understanding Social Inequality*（1991）などのマイノリティ問題の研究者であるとともに, *Causal Inferences in Nonexperimental Research*（1971）をはじめとして計量分析に関する著書・編著を数多く刊行したブレイラックだが, 当時すでに, 彼の著書*Social Statistics*（2nd ed.,1972）が, 大学院における社会統計学の標準テキストとなっていたからである。

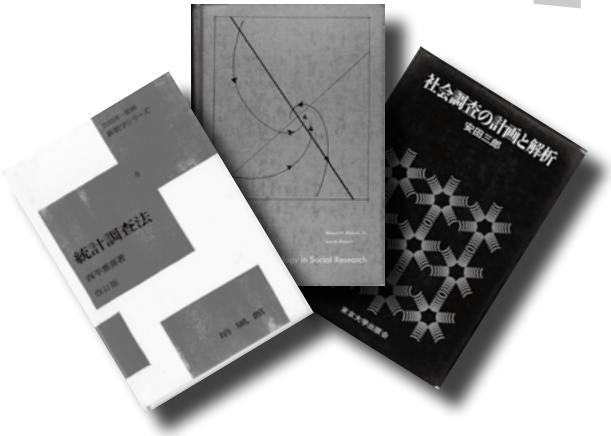
ところで, 社会工学に転じた当初の私は, 修士論文では川崎市の大気汚染問題を対象として, 人々の環境意識や行動を記述・分析し, 公害対策の一助とする積りだった。しかし, 青井ゼミで学んだ方法論はそれなりに面白く, 並行して勉強していた社会調査関係の本からも刺激を受けた。その結果, 修士論文は測定と因果分析に関する方法論ないし技法に関するものにシフトし, その一部は法政大学で開催された日本社会学会大会で報告した。その際の司会者は西田春彦, 安田三郎の両先生で, このお二人には, その後, いろいろとお世話になった。

アイディアの宝庫

『社会調査の計画と解析』安田三郎著
東京大学出版会，1970 年

修士論文を作成する過程では, 転専攻に伴う遅れを取り戻そうと, 多くの本に学んだ。研究室の仲間（荒井克弘, 山田文康, 塚原修一, 中村隆などの諸君）と一緒に読んだ本を思いつくままに挙げると, 見田宗介『価値意識の理論』（1966）,ニューカム・ターナー・コンヴァース著（古畑和孝訳）『社会心理学――人間の相互作用の研究』（1973）, Edgar F Borgatta(ed.) *Sociological Methodology*（*1969*）などである。最後の本は, 先に述べたブレイラックの本の延長線上にアメリカ社会学会の公式刊行物として毎年出版されており, われわれは毎年の新刊本を追いかけて勉強した。

この時期に読んだ本の中でも, とくに具体的に役立ったのは安田三郎『社会調査の計画と解析』である。1971年に刊行された主著『社会移動の研究』（東京大学出版会）とは異なり, 体系だった著作というよりは, 社会調査法や分析法に関するワーキングペーパーを集めたようなものである。標本抽出



法, 質問紙, 説明図式, 意識調査など11章にわたる多彩な記述は, 荒削りなだけに, 初学者であった当時の小生には, さまざまなヒントを与えてくれる本だった。実際, 修士論文の一部は, この本に記されていた「項目分析」の問題点に触発された技法の開発であった。

以上, 化学専攻から社会科学に転じた私自身の勉強を振り返りつつ, その中で出会った3冊の本を取り上げた。社会調査法を学び, 身につけるために学んだ本は, もちろん, この他にもいろいろとある。しかし, 書物を通して学ぶとともに, 人を通して学ぶことも重要だ, というのが, 来し方を振り返った時の, 私の率直な感慨である。

先に紹介した学会発表の後, 司会者の安田三郎先生から, 先生のゼミに参加するよう誘いを受けた。そのゼミは理論構築法に関する本を講読するものだったが, そこに出席していた優秀な院生との関係は, 今日まで続いている。翌年の安田ゼミは, 偏見についての調査をすることになった。参加者はなぜか少なく, 小生が最年長のメンバーだったため, 先生の下で, 調査実施の幹事役を引き受けることになった。『社会移動の研究』を出版し終えた安田先生は, 次の研究課題として「差別と偏見」を考えておられた。その先生の下で直接指導を受けつつ実施した調査の経験は, 実質的に勉強になっただけでなく, 自信にもなった。その他に勉強になった調査体験としては, 林知己夫先生との経験を挙げておこう。それは, NHK放送文化研究所を拠点に行った, 放送番組の価値評価に関する野心的世論調査だった。データ分析を共に担う中で, 数量化理論の創始者が調査データの構造に潜む意味空間を捕えようとする気迫を感じた。